

イメージスキーマと認知言語学：課題と実践*

司会・発表 深田 智 (英知大学) chieft@sapientia.ac.jp
発表 鍋島 弘治朗 (関西大学) naby@muf.biglobe.ne.jp
発表 野澤 元 (京都大学大学院) hajime_nozawa_jp@yahoo.co.jp

イメージスキーマとは、私たちの行動、知覚、概念の中にくり返し現れるパターンや形、規則性のことである (cf. Johnson 1987: 29)。このイメージスキーマは、私たちの実際の身体運動や知覚、モノを操作するという具体的な経験を通して、意味のある構造として立ち現れるものである。これを介して、私たちは、日々の経験を構造化したり、抽象的な事物を理解したりしている。このようなイメージスキーマを、Lakoff (1987: 267) は、日常経験と概念構造をつなぐ前-概念的構造 (preconceptual structures) のひとつとして特徴づけている。ゆえに、このイメージスキーマとの関連で言語表現の意味を分析していくことは非常に重要であると思われる。

しかし、現段階では、イメージスキーマの実在性が実証されているわけでもなく、また、どのようなイメージスキーマが存在するのかについての先験的な基準が存在するわけでもない。したがって、これを用いた言語分析に不十分さがつきまとうのもまた事実である。

本ワークショップでは、まず、イメージスキーマという概念が、これまでの認知言語学において、どのような言語観にたうて、どのような意味で用いられてきたものであるかを再確認した (鍋島)。イメージスキーマが視覚だけでなく複数の感覚を通して構築されるものであることを再認識するとともに、イメージスキーマの一部を観察者が担うという意味でのイメージスキーマの主体化という現象が見られることを示した。しかし、同時に、イメージスキーマの実在性を言語を通して証明することの難しさも明らかになった。

次に、発達心理学や神経心理学との関連でイメージスキーマの実在性を実証しようと試みた (野澤)。イメージスキーマは、発達心理学でいうシエマ (あるいはシエム) と非常に類似する概念であり、イメージスキーマを介して具体的な経験を構造化するという認知プロセスやイメージスキーマを変形させていくという認知プロセスは、それぞれ、発達心理学でいうシエマの同化・調整のプロセスに対応すると考えられることが示された。それによって、少なくとも、イメージスキーマのような前-概念的構造が言語学だけの理論的仮構物ではないことが明らかになった。さらに、最近の神経心理学の成果をもとに、脳内の特定の部位が担う役割とその相互作用の観点から、イメージスキーマを捉え直していこうと試みた。

最後に、もう一度、イメージスキーマの意味の根源としての役割に注目し、それが、実際の言語現象にどのようなかたちで反映されているのかを観察してみた (深田)。その際、これまであまり強調されてこなかったイメージスキーマの機能的な側面に注目し、そこから言語表現の含意あるいは前提と呼ばれるものの一部が導き出されうること示した。また、Langacker の認知文法の枠組みの中で述べられてきた主体化という現象をイメージスキーマとの関連で再解釈することを試みた。それによって、これまで議論されてこなかった意味拡張の一部が説明できるようになっただけでなく、これまで認知言語学で用いられてきた記述・説明項の一部はイメージスキーマとの関連で捉え直すことが可能であるということを示した。

このように、イメージスキーマを介して言語を分析していくということは、言語の意味や形式を日常経験と関連づけながら分析していくということであり、また、言語現象を関連分野の知見と結びつけて理解していくということでもある。それによって、言語に見られる個人差や文化差、言語の歴史的变化や個人の成長に伴う変化等、様々な言語現象を、より体系的に、かつ、より統一的に説明していくことができるようになると思われる。

* 発表後、菊池敦子氏、高尾享幸氏、田村幸誠氏、西田光一氏、松本唯氏ほか、さまざまな方々から貴重な御意見を数多くいただいた。ここに感謝の意を表したい。

鍋島弘治郎 (naby@muf.biglobe.ne.jp)

関西大学

本小稿では、認知言語学におけるイメージ・スキーマの先行研究をまとめ、イメージ・スキーマが一般に考えられる単なる図像ではなく、複数の感覚次元にまたがるマルチモーダル (multi-modal) なものであることを主張する。以下に、Johnson (1987), Lakoff (1987), Turner (1991), Clauser and Croft (1999) からイメージ・スキーマに関してまとめる。

・ Johnson (1987) におけるイメージ・スキーマ

Johnson (1987 : p19-)には、イメージ・スキーマに関して以下のような記述がある。

- (i) The experience of containment typically involves protection from or resistance to, external forces.
- (ii) Containment also limits and restricts forces within the container.
- (iii) Because of this restraint of forces, the contained object gets a relative fixity of location.
- (iv) This relative fixing of location within the container means that the contained object becomes either accessible or inaccessible to the view of some observer.
- (v) Finally, we experience transitivity of containment. If B is in A, then what ever is in B is also in A.

この概略を以下に記す。

- (i) 容器は外部からの力を遮断または和らげる。
- (ii) 容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる。
- (iii) 容器の中のものは比較的位置が変わらない。
- (iv) 容器の中のものは内部の人には見やすく、外部の人には見にくい。
- (v) 容器には推移性が働く (例えば、靴の中にある財布の中の硬貨は必ず靴の中にある)。

すなわち、容器のイメージ・スキーマには少なくとも(i)や(ii)に表される力関係(圧覚)と(iv)に表されるような視覚が関わる。

このほか、イメージ・スキーマのマルチモーダル性に関して、Johnson (1987)では、主体とイメージ・スキーマの関わり方の多様性を(1)のように述べている。

(1) I believe that our sense of our orientation is most intimately tied to our experience of our own bodily orientation. Our body can be the trajector, as in "Paul walked out of the tunnel," or it can be the landmark, as in "She shoveled the potatoes into her mouth."

これは、例えば日本語の例を挙げれば(2)のようになると思われる。¹

- (2) a. 私は部屋の中に入った
b. 私はチキンを丸ごとお腹の中に収めた。

Johnson (1987) では、網羅的でないイメージ・スキーマのリストとして、以下を挙げている。なお、イメージ・スキーマの種類と分類に関しては、Clausner & Croft の項でさらに掘り下げる。

CONTAINER / BALANCE / COMPULSION / BLOCKAGE / COUNTERFORCE / RESTRAINT REMOVAL /
ENABLEMENT / ATTRACTION / MASS-COUNT / PATH / LINK / CENTER-PERIPHERY / CYCLE / NEAR-FAR /
SCALE / PART-WHOLE / MERGING / SPLITTING / FULL-EMPTY / MATCHING / SUPERIMPOSITION /
ITERATION / CONTACT / PROCESS / SURFACE / OBJECT / COLLECTION

・Lakoff (1987) におけるイメージ・スキーマ

Lakoff (1987) では、以下に挙げる通り、イメージという用語が視覚のみを意味しないことが述べられている。

The term image is not intended here to be limited to visual images. We also have auditory images, olfactory images, and images of how forces act upon us. (Lakoff, 1987: 444)

Mental imagery, as we pointed out above, is not merely visual. (ibid. 445)

また、ここでは、メンタル・イメージが身体運動的であるという研究の複数を挙げ、メンタル・イメージが身体運動的であるなら、そのスキーマであるイメージ・スキーマが身体運動的であっても不思議はないと論じている。さらに、272 ページからは CONTAINER, PART-WHOLE, LINK, CENTER-PERIPHERY, SOURCE-PATH-GOAL のスキーマそれぞれに特有の基本ロジックが存在することを論じている。

・Turner (1991) におけるイメージ・スキーマ

Turner (1991) では、例えば、*the scent of pine* にもイメージ・スキーマがあるとすると考えていると思わせる言及がある。このようにすべての感覚にそれぞれにスキーマとしてのイメージ・スキーマがあるとする立場を便宜的に「広義のイメージ・スキーマ」と呼び、繰り返し起こり重要度が高いと思われるイメージのスキーマだけをイメージ・スキーマと呼ぶ Johnson (1987) に記されるような立場を「狭義のイメージ・スキーマ」と呼ぶことにする。

¹ イメージ・スキーマの主体化の詳細に関しては、鍋島(2003)を参照。

Turner は基本的に広義のイメージ・スキーマの立場を取っていると思われるが、以下の部分は主に狭義のイメージ・スキーマを想定した内容と考えられる。

(3) イメージ・スキーマの諸相 (Turner, 1991 p. 176-177:数字は筆者)

- (i) Absolute size is unimportant for image-schemas. (大きさは関係ない)
- (ii) Movements count. (イメージ・スキーマは静止したものだけではない)
- (iii) Number of entities counts. (参加者が1つなのか、2つなのか、・・・多数なのか)
- (iv) Interiors, exteriors, centers, and boundaries count. (内部,外部,中心,境界線は重要である)
- (v) Connectedness of the image counts, as does continuity. Degree of curvature counts, but only in rough fashion. (イメージのつながり、連続性は重要である。ある程度曲がり方も関わる)。
- (vi) Various image-schematic relations (reflexivity, symmetry, and transitivity) count. (反射性、対称性、推移性などは重要である)
- (vii) Certain order relations count. (ある種の順序は重要である)。

Turner (1991) は主にイメージ・スキーマのトポロジー的性質を記述したものとと言える。

・ Clausner and Croft (1999) におけるイメージ・スキーマ

Clausner and Croft (1999) では、Johnson (1987) のイメージ・スキーマのリストを改編して、次のようなリストと分類を挙げている。

SPACE	UP-DOWN, FRONT-BACK, LEFT RIGHT, NEAR-FAR, CENTER-PERIPHERY, CONTACT
SCALE	PATH
CONTAINER	CONTAINMENT, IN-OUT, SURFACE, FULL-EMPTY, CONTENT
FORCE	BALANCE, COUNGTERFORCE, COMPULSION, RESTRAINT, ENABLOEMENT, BLOCKAGE, DIVERSION, ATTRACTION
UNITY/MULTPLICITY	MERGING, COLLECTION, SPLITTING, ITERATION, PART-WHOLE, MASS-COUNT, LINK
IDENTITY	MATCHING SUPERIMPOSITION
EXISTENCE	REMOVAL, BOUNDED SPACE, CYCLE, OBJECT, PROCESS

Clausner and Croft (1999)のリストはイメージ・スキーマの分類を非常に合理的に行ったものと考えられることができる。但し、EXISTANCE の類に挙げられている REMOVAL は本来の Johnson (1987) の記述では RESTRAINT REMOVAL で一句になっていることから EXISTENCE から外すべきであろう。また、PATH が SCALE の一種という上位下位関係にも再考が必要かも知れない。しかし、現在あるイメージ・スキーマの分類としては最も合理的なものと考えられる。

まとめ

本稿では、Johnson (1987), Lakoff (1987), Turner (1991), Clausner and Croft (1999) から、認知言語学におけるイメージ・スキーマについて検討を行った。Johnson (1987) では、<容器のスキーマ>が取り上げられ、少なくとも視覚と圧覚が関わっているマルチモーダル（多感覚一次的）な性格を有していることを確認した。さらに、主体がイメージ・スキーマの LM もしくは TR となる、「主体化されたイメージ・スキーマ」が最初に言及されていることを観察した。

Lakoff (1987)では、*image* という用語が視覚のみならず複数の感覚を含むものとして使用されていること、イメージ・スキーマという用語はイメージのスキーマとして身体運動的である方向性が想定されていることを確認した。

Turner (1991) では、大きさが関わらないこと、参加者の数が関係すること、内部／外部が関連することなど、主にイメージ・スキーマのトポロジ的性質を考察した。加えて、イメージ・スキーマを取り扱う際に「狭義のイメージ・スキーマ」と「広義のイメージ・スキーマ」を区分した。

最後に Clausner and Croft (1999) では、Johnson (1987)を主要なイメージ・スキーマにまとめた分類を観察した。この分類が現在のイメージ・スキーマの理解として最も進んだものではないか。

認知言語学においてイメージ・スキーマは、メタファー研究、多義研究において重要な概念として利用されておりながら、その心理的実在性の検証はなおざりにされてきた感がある。本小稿および関連する研究を通じて、イメージ・スキーマの実在性、および他分野における概念との関連性が解明されていくことが望まれる。

主要参考文献

- Clausner, Timothy and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10-1, pp. 1-31.
- Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- (池上嘉彦、河上誓作他訳 『認知意味論一言語から見た人間の心』, 紀伊国屋書店, 1993年)
- 鍋島弘治朗 2003. メタファーと意味の構造的性. 『認知言語学論考 No. 2』. ひつじ書房.
- Turner, Mark. 1991. *Reading minds: The study of English in the age of cognitive science*. Princeton: Princeton University Press.